

残された記録はなぜ怖いのか

ゴシックから現代日本のモキュメンタリーまで

浜野 志保

1 令和ホラーと「ファウンド・メディア」

2020年頃から、日本ではホラー・エンターテインメントが大衆的な人気を獲得している。雨穴『変な家』（Web版2020,書籍版2021）や背筋『近畿地方のある場所について』（2023）はWeb連載からベストセラーとなり、映画化もされた。小説や映画に加え、動画配信、深夜番組、体験型展覧会などにも人気が広がっている。本稿では、これらを便宜的に「令和ホラー」と呼び、その特徴を十八世紀以降のゴシックとの比較から考える。両者を結ぶ鍵として注目したいのが、物語の内部で「発見された記録」として提示される「ファウンド・メディア」である。

令和ホラーの多くは、フィクションをドキュメンタリーの体裁で提示するモキュメンタリー（mockumentary）の形式をとる。先例として『ほんとにあった！呪いのビデオ』（1999～）、『放送禁止』（2003～）、『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！』（2013～）などが挙げられるが、近年の作品では、映像だけでなく、手紙、日記、公文書、写真、間取り図、ポスター、Webページ、SNS投稿など、異なる媒体に属する断片が組み合わされる。このため、本稿では映像を指す「ファウンド・フッテージ」、文書を指す「ファウンド・マニスクリプト」を包摂する語として「ファウンド・メディア」を用いる。

映像作品におけるモキュメンタリーは、1980年のイタリア映画『食人族』などにも見られるが、その形式を広く知らしめたのは『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』（1999）であった。低予算で撮影された映像を、失踪した学生が遺したフィルムとして提示した同作の成功後、「撮影者不在の記録」を物語の出発点とする作品が数多く制作された。令和ホラーはこの形式を映像以外にも拡張し、媒体ごとに異なる信頼性や物質感を利用している点に特徴がある。

2 断片化された記録とフレームの揺らぎ

ファウンド・メディアを活用した令和ホラーの代表例として、テレビ東京のモキュメンタリー番組「TXQ フィクション」の第5作『神木隆之介』（2026）を見てみよう。同作では、俳優・神木隆之介と番組スタッフが、1980年代に活動していた元子役「てるちゃん」の足跡を追う。調査の過程で、ローカルCMを収録したVHS、インタビュー映像、ファンに宛てた手紙、押し入れの落書き、タレント名鑑、Wikipediaの項目、写真やポスターなどのファウンド・メディアが次々に投入される。個々の記録は不完全で、単独では意味が定まらないが、それらの情報を合わせると、てるちゃんをめぐる出来事の輪郭が徐々に浮かび上がる。

同作では、記録を束ねるフレームも多重化している。神木がファンイベント用に制作した「フェイク心霊動画」、その続編をテレビ東京へ持ち込む舞台裏、番組スタッフと共同制作するフェイクドキュメンタリー、そしてそれら全体を包む「TXQ フィクション」という番組枠である。作品はあらかじめ「フィクション」を名乗りながら、終盤でそれぞれの枠を揺さぶり、どこまでが演出で、どこからが枠外の出来事なのかを不確かにする。フレームを意識させうえて、その境界を破ることが、かえって記録のリアリティを高める。

同様の仕掛けは、令和ホラーの他の作品にも見られる。『変な家』では、間取り図が語り手の言説とは別に存在する「実物」のように示され、『近畿地方のある場所について』では、Web版・書籍版ではインタビューの書き起こしや雑誌記事だったコンテンツが、白石晃士監督による映画版（2025）ではテレビ番組、監視カメラ、自撮り動画などの映像に置き換えられる。『その怪文書を読みましたか』『行方不明展』『恐怖心展』などの体験型展覧会では、文書や図像が壁、窓、柱などに雑然と配置され、来場者が不穏な記録に偶然出会う状況そのものが演出される。ここでは、記録の内容だけでなく、記録を「発見」という体験自体が恐怖の源泉として活用されている。

YouTube上のホラー動画でも、廃墟や心霊スポットで手紙、写真、日記などが文字どおり「発見」される場面は多い。こうした動画は必ずしもフィクションを標榜しないが、孤立した記録が場所の過去を暗示し、映像全体の真正らしさを支える点ではモキュメンタリーと共通する。ファウンド・メディアは、語り手が説明する情報ではなく、受け手が自分の目で確認した証拠のように機能する。しかし証拠が断片的であるほど、そこから導かれる物語は確定せず、不安だけが残される。

3 ゴシックにおける「発見された記録」

もっとも、発見された記録によって虚構に現実味を与える手法は新しいものではない。ダニエル・デフォアの短編小説「ヴィール夫人の亡霊」（1706）は、幽霊出現についての客観的な目撃報告を入手し、公表するという体裁をとる。ゴシック小説の祖とされるホレス・ウォルポール『オトランド城奇譚』（1764）も、

初版では 1529 年にナポリで印刷されたイタリア語の古書を英訳したものとして匿名で刊行された。物語の出所と伝来を説明する偽の書誌情報は、超自然的な物語を「すでに存在した記録」へと変換したのである。

この方法はゴシックの重要な語りの形式として継承された。メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』（1818）では、ウォルトンの手紙の内部にヴィクターの告白が、さらにその内部に怪物の語りが収められる。エドガー・アラン・ポー『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』（1838）では、主人公自身の手記と称する本文を、序文や匿名の編者による後記が挟み込み、ポー本人さえ物語を整理した編集者として位置づけられる。ブラム・ストーカー『ドラキュラ』（1897）に至ると、日記、手紙、新聞記事、電報、蓄音機への口述記録など、同時代の多様な新旧メディアが組み合わされる。これは令和ホラーにおけるファウンド・メディアの集積にきわめて近い。

また、レ・ファニュ『鏡の中におぼろげに』（1872）は、精神科医ヘッセリウス博士が遺した症例記録を、かつての秘書が選択して公表するという枠を備えており、収録作「カーミラ」も、事件当事者である少女の手記として提示される。マチューリン『放浪者メルモス』（1820）では、主人公が叔父の遺品から古い手稿を見つけ、その内部にさらに別の人物の物語が収められる。これらの多重フレームは、出来事への距離を増す一方、複数の証言や編集者の介在によって記録の実在性を演出する。

4 情報環境の変化と〈残された記録〉の恐怖

ゴシックにおけるファウンド・マニュスクリプトの流行は、同時代の好古趣味と深く関わる。古文書や遺物への関心が高まる一方、ジェイムズ・マクファーソンの『オシアン詩集』やトーマス・チャタートンの「ローリー詩篇」のような偽書も注目を集めた。『オトラント城奇譚』が呼び出した遠い過去は、憧憬の対象であると同時に、近代が封じ込めようとした迷信と非理性がなお生きる時代でもあった。発見された古文書という形式は、その危険な過去を、物質的な痕跡として理性の時代へ召喚する装置だったといえる。

一方、令和ホラーが呼び出す過去は、多くの場合、VHS や古いテレビ番組、色褪せた印刷物など、現在の日常と連続する近過去である。本来ならば記録は、事実を保証する証拠となるはずである。だが、その来歴や全体像についての情報が欠けていたり、劣化、欠損、ノイズによって情報の一部が欠落していたりすると、説明できない不気味な余白が強調され、見る者の不安を掻き立てる。見慣れたはずの形式が、ノーマルな状態から微妙にずれ、懐かしさが違和感へと反転するという点では、フロイトのいう「不気味なもの」ともつながっている。

この近過去の表象には、VHS テープを怪異の媒介とした『邪眼霊』（1988）や『リング』（1998）以来の J ホラーの記憶も重なる。また、1980～90 年代のローカル放送、啓発映像、緊急放送などを模倣する「アナログ・ホラー」は、画質・音質の粗さ、テープのノイズ、編集上の欠落を積極的に用いる。欠損は単なる装飾ではない。見ることのできない部分に決定的な情報があるかもしれないという疑念を生み、受け手自身に空白を補わせる仕組みである。

さらに現代では、匿名掲示板に由来するネットロア（ネット空間を通じて広まる都市伝説や噂話）や、SNS 上の「考察」文化がこの形式を支えている。タイムラインを流れる投稿、切り抜かれた映像、検索で偶然見つかるページなど、私たちが日常的に接する情報はすでに断片化されている。令和ホラーはその情報形式を模倣し、受け手に断片の収集・接続・解釈を促す。怪異の原因や結末が断定されないほど、複数の解釈が SNS 上で共有され、作品の外部でも物語は再現なく増殖していく。

また、ゴシックと令和ホラーを結ぶものがあるとすれば、それは「情報のあり方が変化する時代」におけるリアリティの再編ではないかと考えられる。十八世紀末から十九世紀には、上述した古文書や遺物の発見に加え、郵便、新聞、電信、写真、速記、蓄音といった技術が、遠隔地の声や姿を身近な物質へ変えた。一方、現代においては、インターネットを介して、膨大な情報の断片が絶え間なく流通している。日常の情報の形が変われば、「本当にありそうな怪談」の形も変わる。古文書、手記、VHS、監視映像、Web ページという〈残された記録〉が怖いのは、それらが各時代において最も現実的な情報の形を借りながら、記録の背後にある失われた全体を想像させるからなのである。

【参考文献】

Heller-Nicholas, Alexandra. *Found Footage Horror Films: Fear and the Appearance of Reality*. McFarland Publishing, 2014 / 伊藤龍平『怪談の仕掛け』青弓社、2023. / 白石晃士『フェイクドキュメンタリーの教科書：リアリティのある“嘘”を描く映画表現 その歴史と撮影テクニック』誠文堂新光社、2016. / 鈴木潤『J ホラーの確信：女性、フェイク、呪いのビデオ』早川書房、2025. / 廣田龍平『ネット怪談の民俗学』早川書房、2024. / 戸部田誠『フェイクドキュメンタリーの時代：テレビの愉快犯たち』小学館、2024.